

タジキスタンにおける、  
コミュニティ主導教育管理情報システムの考察  
—— 伝統社会と学校修復作業の関連性から ——

増川 智咲

本稿は、コミュニティ主導型開発プロジェクトの一環である、タジキスタンにおける親・コミュニティ参加型の不登校・退学問題 (Non-attendance and Drop outs, 以下 NADO) 解決プロジェクトを扱っている。NADO は、ソ連独立後のタジキスタンにおける教育問題の中でも、最も深刻である。国際援助機関は、この問題を解決するため、地域の人々を動員し、コミュニティ主導型の開発プロジェクトを行っている。しかし実際、コミュニティの参加が、教育プロジェクトの効果に与えるインパクトは詳細に分析されていない。本稿は、コミュニティ主導型教育管理情報システム (c-EMIS) のケースを用いることで、意思決定やプロジェクト形成過程における、コミュニティの伝統的バックグラウンドの影響を考察している。c-EMIS とは、コミュニティが地域でインタビューを行い、NADO の原因を特定し、それを解決するためのプロジェクトを実施する一連のシステムである。

数量的・定性的統計データによると、NADO の原因として様々な点 (貧困、宗教など) が挙げられている。(MoE; 2002, UNICEF; 2004) それにもかかわらず、c-EMIS のプロジェクトは主に、学校修復問題に集中している。(Save the Children, 2007) 問題の根源が、学校の建物以外にもあるにも関わらず、学校修復問題を中心的に取り組むということは、c-EMIS によるプロジェクトは、必ずしも NADO 問題の根本的な解決となることを意図しているわけではないのだろうかという疑問が生じる。そこで、本稿は次の 2 点の仮説を提示した。

- 1) c-EMIS の意思決定過程は、主に、伝統社会の歴史的、社会的、文化的なバックグラウンドによる影響を受けやすいのではないだろうか。
- 2) 学校修復プロジェクトは、NADO への根本的な問題解決となるよりも、このプロジェクトを通じた「副次的 (unexpected) 効果」の方が中心的に求められているのではないか。

これらの仮定を踏まえた上で、本稿の最終的な目的は、c-EMIS と伝統社会の社会的・歴史的・文化的特性の相関関係を明らかにすることにある。

本稿は、これらの仮説を明らかにするため、ロシア革命以前から、ソ連独立までのコミュニティと学校修復の歴史的関係を考察した。その結果、コミュニティがそれぞれの時代に合った形で、学校の修復作業に関わっていることが明らかとなった。その形は、伝統的社会による「奉仕の意味」を持ったハシャール(hashar)や、ソ連時代のホルホーズを単位としたものなどであった。つまり、タジク社会には、コミュニティが学校修復に参加するという歴史的な「慣習」があったことを意味し、c-EMIS のプロジェクトもその「歴史的連続性(=慣習)」を引き継いだものであるということである。従って、コミュニティ主導の開発における、プロジェクト形成や意思決定は、コミュニティ自体の歴史的な特徴の影響を受ける傾向があると言えるだろう。

それでは、このような「歴史的連続性」を、ドナーはどのように捉えているのだろうか。本稿では、c-EMIS プロジェクトを導入することによる、「副次的効果(unexpected effects)」が存在するため、この「歴史的連続性」が否定的に評価されているわけではないと指摘している。その「副次的効果」とは、コミュニティのエンパワメントや、意識改革を意味する。現に、c-EMIS の主要な特徴である、民主的な意思決定プロセスや、特定の目的(NADO 解決)を持った、問題解決のための学校修復作業という一連のプロセスは、ハシャールやホルホーズでは見られなかった。従って、c-EMIS プロジェクトは、内容が「学校修復」という過去と同様の地域活動だとしても、過去からの遺産を受け継いだものであるということではなく、上記のような「副次的効果」をもたらしているのである。このような「副次的効果」は、学校修復プロジェクトによる直接的な結果として、数値的に表れるものではなく、プロジェクトの過程で生じる効果なのである。

以上より、c-EMIS プロジェクトとコミュニティの伝統的バックグラウンドには相関関係があると結論付けられる。コミュニティによる教育問題解決への貢献は、必ずしもすべての問題に対する「万能薬」とは言えない。なぜなら、伝統的社会はいくつかの制限の下、プロジェクトに参加するためである。その制限とは、時間、資金、情報に加え、歴史的・社会的・文化的要素であると指摘した。プロジェクトを行うドナーは、コミュニティ参加型のプロジェクトを行う際、このような相関関係を考慮しなければならない。そうしなければ、このアプローチの利点が軽減される可能性があるためである。ファーガソンが指摘するように、アウトサイダーとしてのドナーは、対象コミュニティの人々が「何をすべきか」

を考える前に、彼らが伝統的に「何を行ってきたのか」という点を考えなければならない。(Ferguson, 1996) そして、それをどのようにプロジェクトに応用できるかを分析する必要性があり、c-EMISはその点でコミュニティに内在する特徴を捉えたプロジェクトであると言える。

(東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究修士課程)